

『この夏』 山口仁史

猛暑に魘され布団に滲む汗、締め切った窓が頭痛を誘った始まりの頃
腰が壊れ、歯が砕け、目が霞み、耳が籠る
窓全開で風を誘った終わりの頃、夜露が骨身を労り、鈴虫の音が慰める

避暑に訪れた幼子は道しるべを失う
熱中が迷いの森と底なしの海に誘う時がある
窮地を救うは使い古した愛具を背負う練り者
蒸し暑さが安堵に変わった一瞬

高速がその役を果たさない、照り返す車たちの渋列と帯列
冷房の効き過ぎた長距離バスからその道を俯瞰する
陽を遮るカーテンの傍から眺める夏の装いが走り過ぎる
目的の地が遠退く歪みに戸惑いながら

台風と豪雨が昨日までの進路を奪う
濁流が家屋を飲み込み、車体は濁水に埋もれ、向日葵が舞い散る
列島の民は宿命に堪えながら明日に備え貯える

昼中の熱波に揺れる甲子園、深夜に観る海外のスタジアム、若き強者の競技場
強者は穢れた現世の浄化を願い、暑さを呑み込み、注ぎのオリンピックに奮い発つ
高揚する首都も、復興に喘ぐ被災地も、疲弊する地方も、強者に導かれ変容に勤しむ

リビングに腰を据えると、赤い服と青い服の姉妹がテレビ音の傍で戯れる姿が映る
小島の天守閣に天空の風が舞い込み、ひんやりとした洞窟の灯りが観覧者を照らす
猛暑に飽いた観光に導かれ、帰ることのないこの夏の夜の景観に心から涼む
冷房の効いた職場は幸運かもしれない、効きすぎた生活は悲運かもしれない

70年経った終戦の夏は清涼の神社を咆哮と鎮魂の渦に見舞う
33回忌の霊山が埋まらぬ心を慰める
魂を奪った異端の聖者に裁断が下り、空蝉の新たな鳴きに継ぎの夏の予感を垣間見る
熱中の後の秋霖に彷徨い、魂を救いながらも体を蝕む諸々の嗜好との別れを惜しみ
この夏の終わりを噛みしめる